

桑名の材木商であり、廻船問屋であった佐々部家は長州の毛利家に仕えた武士であって、豊臣秀吉の朝鮮出兵に参戦し、戦功をあげたといわれる。その後の隆貞が長島領主の松平定政（1635—49 年在位）に仕えた。隆貞は眼病で引退し長州へ帰ったが、その子の祐重（1691 年歿）は桑名で商人となった。その子・祐信（1746 年歿）は岱山と号する俳人でもあり、「時雨蛤」の命名者といわれる。

佐々部家の文書は約 3 万点が桑名市博物館に寄託または寄贈されている。この文書を私は見ていないが、『三重県史研究』第 36 号（2021 年）に江戸時代中期の桑名町の様子が紹介されている。また三重大学大学院人文社会科学研究所の「三重の文化と社会」研究報告書（2016 年）では材木商としての佐々部家が紹介されている。

飛騨川沿岸の材木は飛騨川から木曾川を筏で下り、桑名に集められ、さらに船に積まれて各地へ送られた。桑名での業務は佐々部家が取り扱った。享保 11（1726）年には郡上藩領小野村の材木 530 本を 16 乗の筏に組んで桑名の佐々部家へ送られている。幕府の御用材も寛政 11（1799）年から桑名で取り扱って、江戸への回送業務にあたったのが佐々部家である。桑名での置場は佐々部家（太一丸）の前、鍋屋堤、上之輪の揖斐川沿いと長島領の又木であった。



照源寺にある佐々部家墓所

佐々部家は廻船問屋であった。弘化 2（1845）年に岩村藩の米を江戸へ送った記録が知られる（『岐阜県史資料編近世 7』）。この年に岩村藩米 1500 俵が木曾川の兼山湊から川船で桑名湊へ送られてきた。桑名湊では廻船問屋佐々部茂

左衛門と田村甚兵衛が取り扱った。1500 俵のうち、600 俵は知多半島の中須村と常滑村、伊勢白子村の船に積まれて江戸へ送られた。大きな船で一度に送るのでなく、小分けして送られたのは海上での難船などのリスクを避けたためかと思われる。安政 4（1857）年の記録では米の他にも荒物、紙、茶なども送られている。

東海道筋の安永の常夜灯（文政元＝1818 年建立）は桑名や岐阜の材木屋が寄進しているが、その中に佐々部茂左衛門も名を連ねている。

幕末の佐々部家は桑名を代表する町衆であって、天保 12（1841）年に設立された「御内用懸」（桑名藩へ金を貸し付ける町人の組織）の 7 人のうちの 1 人であった。

佐々部家文書が戦災に遭わずに残されてきたことに敬意を払うと共に、この文書が解明されて、江戸時代から昭和にかけての桑名の町衆のことが明らかになることを願っている。